

T S 少女 × 異種姦生活記

ぐるぐるおめめ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

意思薄弱になるまで追い込まれたおじさんが、性別を変えて異世界で満喫する話です。

R18は保険。

3	2	1
34	18	1

目次

丁度Tシャツだけでは肌寒くなってきた頃、私は不慮の事故でこの世を去った。

だというのに私の前には土下座で平謝りする腰の低い会社員が一人。

まるでクレーム担当かのようなこちらが引くほどの仰々しさを持って謝罪の言葉を告げていた。

「あの、もうわかったんで。私は死んだんですよね？ 死因はなんだったんです？」

「それが、上司の手違いで。本当なら貴方様はあと7年は生きてられました」

それでも7年しか余命は伸びないのか。

なんだか目の前で平謝りしている相手が当時の自分と重なった。

ふと前世を思い出す。

思えば私は人の顔を窺って生きてきた。

両親は勉強も碌にできない私よりも、兄に情熱を注ぎ、家族団欒の中に入れてもらっても私の話は一切上がらない。

たまに話を振ってきた時は、だいたい見下す時だ。

もう少し兄を見習いなさいとお叱りの声をいただいて、言葉少なめに返事をして自室に籠る日々。

ニートになることも許されず、高校を出た後はアットホームと打たれた会社に入社。

しかしそれは罨で、家族になったんなら残業代払わなくていいよな？ という横暴が罷り通る地獄の始まりだった。

高卒の出来損ないを雇ってやってるだけありがたく思いなさい。

それが社長の言葉で、それこそ会社のために身を粉にして働き、そして今、他人の手違いでこの場にいる。

なんだかこのまま生き返ったところで幸せになれる道は閉ざされてる気がした。

「そうだったんですか。じゃあ天国でもなんでも連れて行って貰えませんか？」

「えっ？ 生き返れるチャンスがあるのに、それを棒に振ると言うのですか？」

「仮に生き返れるとして、全く同じ人生を歩むなら、もう私はあの生活に戻りたくないです。どのみちあと7年しか生きられないんでしょ？ だったら全く別の世界で、違う人生を生きなおしたいなあ」

「でしたら異世界転生プランはいかがですか？」

「異世界転生プラン？」

思わず相手の言った言葉通り聞き返す。

あまりに素っ頓狂な声だっただろうか？

言った自分でも少し馬鹿っぽく感じた。

「はい。以前流行した転生プランですが、今ではざまあが流行して見向きもされなくなっただんですよね」

「えと、なんの話でしょうか？」

「失礼、脱線しました。こちらの話です。それで、如何ですか？」

「話だけでも聞いてみていいですか？」

「はい」

まさか自分にそんな話を持って来られるなんて思いもしない。

一縷の望みをかけ、私はそのプランに乗っかることにした。

サラリーマンは鞆からクリップで纏められたプリント用紙を手渡ししてくる。

こういうところも日本と死後の世界も変わらないものだ。

その一覧を眺めて、ふと気になった部分を質問してみる。

「あの」

「はい」

「このチーレムプランというのは？」

「よくぞお聞きになられました！」

男は鼻息荒く私に迫る。

「あの、近いです」

「すいません、少し興奮しまして」

あまりの食いつきの良さに恐怖を感じた。

男は軽く咳払いした後、失礼と一言発してから口頭で説明してくれた。

「チーレムプラン。俗に言う男の欲望を詰め込んだセットですね。男は大勢の女を侍らせて、力を誇示するものでしょう?」

「そうなんですかね? 最近は生きるのがやつとでよくわからなくなってきました」

「そうなんですよ! 一昔前はそれが男の勲章としてもてはやされてきました。ですが今は疲れた方が多いでしょう、今の貴方みたいに他の世界でスローライフを望む方が多いのです。それとごまあですね。憎たらしい上司をギャフンと言わせたい! そう思ってる方が多いのです」

「言わんとしてることは分かりますよ。私も今の上司に一つ二つ言いたいことがありますから」

「では貴方もごまあを望まれますか?」

男はハッキリと落胆する様に聞いてくる。

しかし私は首を横に振った。

「いえ。そんな気も起きませんよ。もう何もかもがどうでもいいんです。このまま放っておいてください。ただそれだけです」

「いけません! 貴方様は生きる気力を失いすぎてます。それでは新しい世界でも生きていけるか分かりません」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい私が悪いんです。許してください申し訳ありません」

強い言葉をかけられると、すぐにこの言葉が口をついて出る。

「もう貴方は男としての自信を失いかけていますね。いつそ女になって暮らしてみますか?」

「ふふ。良いですね、案外それも良いかもしれません」

「おや、乗り気ですか?」

「ええ、男でいるのも懲り懲りです。そして女になったからにはあまり男が強い世界にも行きたくない。わがままばかりで申し訳ありません」

「いえいえ、でしたらちようど良い世界があるんですよ」

「へえ、そんな世界があるんですね。種の繁栄には影響しないんですか?」

「全くないとは言いませんが、うまいこと回っていますよ。そこは女性のみが暮らす世界で、他は異形種族との間に子供を儲けて共存していますね」

「え、っ、それは……」

男が存在しない。

けど相手は異形種のみと言われて私は二の句を告げずにいた。誰だってそうだろう。

若かりし頃の性癖の幾つかには触手姦などを齧った事もある。

みてる分には良いが、自分がやられる側になると言うのは少し遠慮して欲しいものだ。

「ですが皆が女性ですから、お悩みは打ち明けやすいでしょう?」

「それは、まあ」

「では決定しますか?」

「その前に、すぐ死んじゃうのは嫌なのでいくつかチートを持たせてください」

「お、随分とその気になってきましたね? 良いでしょう。元々はチーレムプランでしたしね。いくつか生き延びるためのスキルを持たせておきますよ」

「それではよろしくお願いします」

「はい、良き旅を」

「行つてきます」

心機一転、と言って良いかもわからないが、私は気持ちをあたためて新しい世界へ一歩踏み入れた。



「ん、んう……」

風がそよぎ、肌に優しく触れては過ぎ去っていく。

微かに土の香り。

ハツと起き上がって左腕に時計を探す。

「つて、いけないいけない。私は異世界に転生したんだつた」

長年勤め人だった思考はすぐには消え去ってくれず、誰かに見られていやしないかと周囲を警戒する。

誰もいないのを確認し、サラリーマンから教えてもらった魔法の言葉を思い出す。

「ステータスオープン」

口で言う必要はないけど、こういうのは気分だ。

別にこの世界に最強になりきたわけじゃないし、見たからって何が変わるわけでもない。

ただしどんなスキルを貰ったのか一切聞いてないのもあり、情報のすり合わせをするためにも必要だった。

■ステータス

ネーム：未設定

職業：無職

年齢：11

レベル：1

称号：---

■割り振りポイント：0

技量：5

耐久：5

精神：10

魅力：10

■装備

貫頭衣

■スキル

魅惑の掛水／射程10cm、命中時相手の好感度特大
混種の抽選／???

孵化の促進／???

■取得種

なし

■残機：1／1

うん、みたところで何が何やらわからない。

最近ゲームらしいゲームもしてないからなあ。

今はサラリーマン風の男の言葉を信じるしかないか。

取り敢えず判明しているスキルを確認してみる。

魅惑の掛水。射程の短さは致命的だが、接触できる距離で発動できるスキルなのだろう。

右も左も分からない場所での好感度特大は人見知りの私には丁度いい。

「魅惑の掛水」

口頭で述べてみたが、特に何も起きなかった。

フレーズを述べるタイプじゃないのかもしれない。

もしかして魔法の類か？

体の中に巡る何かを掴む必要があるんだっけ？

難しいな。よくわからない。

スキルは後回しにして、自分の見た目を再確認した。

年齢はステータスにも載ってたので11歳で間違いない。

随分と若返ったな。

ストレスで後頭部が後退し続けてた年齢だったから若い体の方が助かると言えば助けるけど。なぜこの年齢なのかは分からない。

髪の色はオレンジ。どこからどうみても日本人ではない。

この世界では一般的な色合いなのだろうか？

人差し指で摘んでみても、不思議と違和感は無かった。

すっかりとこの体に馴染んでいる。

魂の定着が自然なのだとわかる。

そう言えばこの世界がなんて呼ばれてるのかも知らないや。

それはゆくゆく覚えていけばいいのかな？
それよりも……早く人に会わないと。

ここには怖い異形種が住んでるんだよね？

上手いこと共存してるっていうけど、絶対R18なお付き合いだよ
ね？

ちよつと私は自信ない。

男だった時も最後まで使わずに取っておいたタイプだ。
今世でも使わないでいるならそれに越したことがない。

「つて、なんだかおしっこしたくなってきた」

こんな事いちいち口にしなくなっちゃっていいのはわかる。

でも、人寂しさから誰かに見つけて欲しくてついつい言葉にしてしま
まう。

異形に見つかりたくないといつも、やっぱりどこかその先を想
像してしまうのはこの世界に生まれた身体ろうか？

心の中では疲れたオツサンのつもりなのに、側に心が引っ張られる
ようだった。

結局草むらでしやがんで垂れ流す。

出してる時は気が気じゃなかったけど、出した後は随分とさっぱり
した気持ちだ。

男の時より若干気持ちいい。

なんでだろう？

おしっこしてるだけなのに気持ちよかった。

まさか感じてる？

その辺の葉っぱでデリケートな部分を拭いて、水場を探す。

やはり興味は尽きないものだ。

男の頃から興味があった女性の神秘。

どこか背徳的で、触れてはいけない場所という勝手な思い込みが
あった。

でも自分のものならば、誰にも咎められないだろう。

足がつくくらいの浅瀬にしゃがみ込み、先程様を足した時の汚れを
落とした。

「う……ふう……くうん」

やっぱり。私の体は感じやすいのかもしれない。

もしかしくなくても異形種と致しやすい為に肉体が適応化してるのかな？

しゃがみこんで川に触れるか触れないかのところで接触を楽しむ。

「これ以上は、やばいかな？」

思わず引き返せないほどの領域に足を踏み込むところだった。

言ってしまうがイクか行かないかの境界線。

男もそうだが女もオーガズム直後は無防備になると聞く。

「ほどほどにしないとね」

自分に言い聞かせるように、貫頭衣で隠れるその場所のことを気にしないようにする。

気持ちいいのはいいけど、ハマりすぎに注意だ。

それよりも人を探さないと。

森の中を歩く。

道中で見つけた木の实や果実をもいで口の中に入れた。

腹の足しになればと、味は気にしないでなんでも放り込む。

腰に巻きつけた紐に挟むように、詰んだ果実を括った。

どれほど歩いただろう？

山道は険しさを増し、人里はまるで見えてこない。

陽はだんだんと沈み、そして夜の帳が下りてしまう。

まだ昼頃はよかった。

ほんのり涼しい程度で済んだから。

しかし夜が来て一気に涼しいが肌寒くなった。

身震いをしながら木の葉を集めてその中で過ごす。

ガサ ガサ

そんな時に物音がした。

もし異形種との初接触だったとしても、なんとかスルーしてもらえないだろうか？

未だに怖くて自分で触れられもしないのに。

そんな場所に堂々と入り込まれたら困ってしまう。

って、まだそうだと決まったわけじゃないのに、私ってばここにきてから本当にそればかり。

ガサ ガサ

茂みから飛び出してきたのは、白くて丸いスライム状の物体だった。

よく観察してみると、ものすごく弱々しい。

このまま放置したら死んでしまいそうだ。

彼もきつと異形種なのだろう。

もつとずつと怖くてグロテスクなのを想像していたので、ホツとした気分だった。

私は木の葉で塞いでいた視線をどかし、彼の前へと姿を現す。

「キミ、群れから逸れてしまったの？」

「ピ!？」

白いスライムは私がとって食うとでも思ったのか、体を小刻みに揺らして驚いていた。

なんだかその姿が前世の私と被ってしまう。

上司から回された仕事。右も左も分からない場所でプレゼンをした時は彼のように周囲を気にしてばかりだった。

だからどつと手を差し伸べる。

「おいで、私が一緒にいてあげる」

「ピ!？」

「キミの群れを見つけるまでの間、私のお話相手になってくれる？」

言葉が通じてるかはわからない。

けれど白いスライムはうねうねと体を揺らしながら「ピ!」と答えて私の体に擦り付いた。

「うっ」

その白いスライムはほんのり栗の花の匂いがした。

男であった時の種の匂いを想起させる。

白濁とした塊が自分の肌にくっつく様は、事後のようだ。

でも自分に言い聞かせるように手のひらで包み込んでやる。

「大丈夫、私はキミの味方だよ。だから怖がらないで？」

「ぴゃー」

少しばかり緊張の糸が解けたのだろうか？

ほんのり気の抜けた返事が聞こえた。

その異形はシロと名付ける。

練乳やカルピスにそっくりだったからだ。

決して他の何かに似ていたとしても、断じて違う。

やや水っぽい体を波打たせて、移動する時は射精を放り出した時に似た動きをするのが特徴だ。

本当に見れば見るほど精子に魂が宿ったみたいな特徴を揃えている。

隙を見せすぎると隙間から内側に入り込もうとするから要注意だ。

やっぱりこの世界の住民と異形種はR18の関係で共存してるんだなって教えられた気がした。

◇

「れる、あむ♡ ちゆる、じゆるるる♡」

ここ最近、美味しい果実を見つけてそれを夢中でしゃぶっている。

特定の行動を取らないと美味しい果汁が出てこないのだ。

それは長く、口の中には入りきらない。

木の幹から生えていて、若干キノコに酷似していた。

唾液を含ませると薄皮がむけて、ぷるんとした実が現れる。

しかし焦ってはいけない。

実も美味しいが、内側に凝り固まった果汁が詰まってるのだ。

それをほぐして吸い出す為にこうして根元を刺激しながら先端を丹念に舐め回す必要があった。

「うぶー！ んぐ、んぐ、こくん。げぶっ」

ちよつと想定より早く果汁が出てきてしまったので驚くが、無事に全部飲み込んだ。

ちよつとげぶぶを出してしまうがご愛嬌だ。

「ごめん、シロ。時間かけちゃった」

「ピキ！」

「え、待ってないって?」

「ピキユ」

「それならいいけど」

口の端についた粘つく果汁を指でかき集めてぺろりと舐めとる。

出る時は汁っぽいののに、空気に触れるとすぐにゼリー状になっちゃうんだよね。

そしてこれの効果はただ美味しいだけじゃなくて、寒い夜に向けて温暖効果もあった。

体がぽかぽかとあったまってくるのを感じて、シロを呼び寄せてお決まりの場所で寝入る。

女の体は男より不便なところも多いが、今のところ生活していく上では苦は少ない。

おしっこする時の我慢が利かないので、出る! と思った時には予測より早く出てきてしまう事だろうか。

そんな時にシロが活躍してくれる。

彼はスライムだから液体はなんでも吸収してくれるのだ。

それが私の排泄物であろうと構わず。

おしっこが間に合わない時は主に彼に簡易トイレになってもらっていた。

ばっちいと思うかもしれないが、衛生の概念が破綻してるこの世界ではこれが運用方法の可能性すら出てくるわけで。

今やその存在に大きく助けられている私がいだ。

それに意外と可愛いんだよ、この子。

私をお母さんだと思ってくれてるのだろうか?

ちよつとオマセな所もあるけど、嫌がればそこまで無理強いしてこない。

けど最初であった時よりちよつと大きくなってきているような気がした。

当時は人差し指にも満たなかったのに、今では怒張した男根くらいはある。

って、何言ってるんだろうか私は。
女になってから貫かれることばかり想像している。

男だった時もむつつりだったが、それは今世でもせおっていかなければならないようだ

そんなふうに思っていたからかもしれない。

その晩、また下腹部に侵入しようとする感触があった。

「ごらー。だめだよ」

またいつもの悪戯かと思った。

しかしそこにあつたのは怒張した男根で、シロの肉体のほとんどをその部分に形成させていた。それ以外は表面にくつつく程度で、シロにとつてはそれはとても大切な事のようなだった。

まるでもう少し少ない時間をこれに賭ける。そんな気迫さえ感じとる。それを手で掴む。

すごく大きくて熱い。

果たして自分の中にこれが収まるかもわからない。

だというのにどこか諦めたような心地。

他の異形だったら絶対に許さないだろうけど、シロにだったらいいかな？

そんな気持ち私が私の中に燻った。

誰でもない、自身がそれを望んでいる。

男と女の関係にはならないつもりだったけど、向こうはオスで、私はメスなのだ。

「困ったなあ、そんなに私とシたいの？」

「ピー！」

「他の子じゃなくて、私がいいの？　ただ近くにいたからとかだったらダメだよ？」

「ピー！」

シロの答えは変わらない。

ただ張り上げた熱量を持って、私にその気持ちを送ってきた。

「仕方ない。あまり得意じゃないけどシロの初舞台。私と一緒に見届けてあげる」

「ピキー！」

任せてくれ！ そう聞こえた気がした。

私は内股だった、ぴたりと閉じていたその場所を。
ゆっくりとM字に広げた。

「他人にこういう場面見られたら恥ずかしいな」

「ピキ」

綺麗だよ、だなんて聞こえた気がして、シロが変化した男根がゆっ
くりと入り込んでくる。

「うぐ、くううう」

痛みはない。

ただ、腹が圧迫される苦しさが膣内を襲う。

「ピキキュ」

まだ先端が入っただけだと言う無慈悲な宣告。

これが口だったら序の口。

想像以上に膣は狭いんだ。

当たり前だ。前戯なしでの挿入なんて前代未聞。

人間だったらビンタされたって文句も言えない。

それでも苦しさはじわじわと緩和され、次第に気持ちよさが私の脳
裏を掠めていく。

背筋が弾けるように何度も跳ねた。

達したのだ。まだ一切の動きがないにもかかわらず、男根に酷似し
たそれは膣内を這いずりまわった。

膨らんだ胎盤が、生きているかのように脈動する。

私の内側はこねくり回され、やがてときほぐされて柔らかさを得て
いた。

しかしそれを知覚するまでに数百を超えるほどの絶頂を迎えた。

男の時の絶頂とは違い、終わりが来ない。

ずっと賢者モードというのも違うが、何も抵抗できないまま、いた
ずらに膣内を蹂躪される感覚が近いか。

人間との交配なら前後運動、又は捻りを加える程度だろうが、スラ
イムのそれは根本的に違う。まるで内側を舐めしゃぶられるような、

膣全体が喜びに打ち震えるような快樂のジェットコースターが私の体に変化をもたらす。

それとステータスの数値がガンガン変動した。
主に耐久の数値が一気に跳ね上がる。

まるでその数値が高ければ高いほど好意の時間を楽しめるかのよう
に、ステータスを上書きしていった。

痛みは一切なく、周囲に自分のものとは思えない叫声が響く。
言葉にならない声。

目は白目を剥き、涙と涎を垂れ流し放題。

絶対に人に見せられない酷い顔をして、イキ狂っている。

それでも根底にあるのはシロを見守ろうという母性。

女として、男を受け止める覚悟だけは打ち砕けず、そこにあり続けた。

事後、力尽きたのかシロは肉体を維持できずに精液のように私の膣
内で弾けた。

膨れ上がったお腹から押し出されるようにシロだったものが流さ
れていく。

足元にはシロの体積以上に積み上がった白濁が排出されていて、こ
れが異形種との交配なのかと初めっからハードすぎるよと泣きそう
になった。

そしてステータスの確認。

何故かそうしないといけないと思った。

シロが残した軌跡が、確かにその場所に残されていたから。

■ステータス

ネーム：未設定

職業：無職

年齢：11

レベル：2

称号：11

■割り振りポイント：10

技量：5

耐久：70

精神：80

魅力：10

■装備

貫頭衣

■スキル

魅惑の掛水／射程10cm、命中時相手の好感度特大

混種の抽選／複数の命を用いて新しいアイテムを創造する

孵化の促進／入手した種を素早く育てる。残機1消費

■取得種

◎ホワイトスプラッシュスライム〈希少種〉

寿命が短く、発生して間もなく死に至る生存力の弱さから絶滅危惧種扱いをされている。

その種は今はいない男の精液に酷似しており、大変貴重。

出産の機会があつたら子を引き取りたいと名乗り出る里親多し

■残機：3／3

「あの子、すごい子だったんだ」

どうりで見た目とはかけ離れた攻めを見せると思った。

しかしエッチは体験したものの、出産となると少し覚悟が必要だ。

あんなに激しい行為をした後だとはいえ、出産は母体の命の危険があるからさ。

そこで魅惑の掛水以外にもオープンになつてるスキルを拝見する。

よく見ればちよいどいいスキルを発見した。

「孵化の促進か。もう一つのスキルはよくわからないが、今はまだ起動できないみたいだ。それはともかくとして、ちよっと疲れたな」

事後。

どう考えても日常が霞むほどの体験をして、私は深い眠りについていた。

そしてぺちぺちと頬を叩く感触を受けて目を覚ます。

「う、うん……むにやむにや」

「おーい、二度寝するな」

「ハッ！」

「お、やっと起きたか？」

目を覚ませれば見慣れぬ格好の女性が二人。

私の身を心配して声をかけてくれたようだ。

まあ酷い格好だもんね、今の私。

改めて再確認して苦笑してしまう。

笑ってスルーしてくれればいいけど。

「えっとう？」

改めて状況を聞き返す。

偶然見つけて貰ったという状況でもないだろう。

「あたしらはこの辺をナワバリにしているミーアファミリーってものだ」

「ここいらで聞きなれない喘ぎ声を聞いたって連絡があつてな。捜索しに来てあんたを拾った」

「あ、そうだったんですか。あの声聞かれちゃってたんだ。恥ずかしいなあ」

自分のことながら、今更恥ずかしさが込み上げてくる。

うう、穴があつたら入り込んでしまいたい。

「んだあ、今時セックスして恥ずかしがるなんて珍しいな。やっぱり箱入りか？」

「ちよつとお、面倒ごととか嫌よお？」

何やらお姉さん二人はキナクさい話をしている。

セックスがあいさつみたいいな世界って聞こえただけど気のせいかな？

そんな日常的に発散してる世界があるなんて未だに信じられない。とにかく話を合わせるか。

「それで、えーと。私はどうなってしまうんでしょう？」

「取り敢えず近くの村のギルドによって報告だな」

「ギルド、ですか？」

ギルドという冒険者ギルドとかそういう寄り合い所みたいなどころだろうか？

私の事を勘違いしてるし、どの道ついていけないとこのままだ。

そう思えばシロの喪失を悲しんでるばかりじゃダメだよな。

「で、あんたのお前名前は？」

「えと……」

そういえば全く違う自分を体験する為に過去の名前は捨てたんだっけか。

そして日本人特有の言い訳が抜けきれない状態で勘違いされてしまふ。

「そうかエトか。よろしくな、エト」

そんなわけで私の新しい名前が決定した。

「じゃあ、残機が残ってる限り復活が可能なんですね」

「そうだな。ってそんなの常識だろう?」

街に帰る間、ミーアさんからいろんな話を聞く。

そこである程度話を合わせていたら、意外な事をつつまれてしまう。

私の知識の浅さを疑うように見咎められた。

「そうでしたっけ? すいません。記憶があやふやでして。あはは」

「あんた変なやつねー。まさか記憶喪失とかってやつ?」

「リヤナ、あまり聞いてやるな。この容姿、記憶の浅さ。多分あれだ」
「まあ、でしょうね」

何かを言い合ってる二人。

私の知らない情報なんだろうな。

その会話を終えた後、同情するような視線を向けられた。

見つかった時の格好や、状態から変な子だと思われてなきやいいけど。

「取り敢えずエト、ねーちゃん達が街を案内してやるから。安心しなって」

「はい、ありがとうございます」

「まったく、大将は面倒見がいいんだから。うちにそんな余裕はないわよ?」

「それでも! 迷い子を放って置けるほど人でなしになったつもりはないっつての」

「はいはい、あたしは大将の命令に従いますよ」

「それでいい!」

なんだか会話だけで二人がどんな関係かわかった気がする。

自分の判断で周囲を振り回すリーダーのミーアさんと、苦労人ポジのリヤナさん。

お小言が多いあたり、こんな言い合いも日常なんだろうな。

そんな言い合いを眺めてるうちに、木の柵で囲われた町に着く。

おかしい、私が歩き回った時にこんな場所見た事ないのに。
キヨロキヨロと周囲をうかがっていると、頭の上に手を置かれた。
「ほら、キヨロキヨロすんな。この町はな、周囲の森から隔離されてるんだ」

「どうしてですか？」

「あたしら人間と異形は完璧に共存出来てないからだよ。種のやりとり以外で意思の疎通はない。だから話も通じないし相手を思いやることもできないんだ」

「それで生息圏を分けて暮らしてるのさ」

「なるほど、理解しました」

「やっぱりそうなんだ。」

異形との意思疎通は叶わない。

シロの事を何一つ分からないまま受け入れた私は、あの後あんな目にあうなんて分からなくて。

それでも寂しさから手を伸ばしてしまった。

そこに愛情があつたかは分からない。

苦しさで吐き気、それを上回る快樂だけがその答え。

この世界はやりきれない感情を抱えて維持されてる。

「あら、この子結構飲み込みいいわね。本当に迷い子かしら？」

「いや、親の系統が精神寄りなんだろ。あたしは耐久寄りだったし」

「そう言うものかしら？」

「あんまり根掘り葉掘り聞くんじゃねーだろ？ あたしらだって大した過去を持つてるわけでもねえ」

「それもそうね。悪かったわ」

「いえ」

ミーアさんに着いていき、何かの膜を通り過ぎた。

身体中にまとわりつくような粘膜。

分厚い空気の層を通りこし、すぐ後ろを振り返る。

「あれ？ さっきの道消えちやいました」

「さっき通ったのが異形の住む場所とあたしら人間の住む場所を繋ぐ境界線なのさ。異形は感知出来ず、あたしらは特殊な道具でその位置

を確認できる。ギルドって言ってな、そこに登録すれば専用の道具を借りることができるんだ」

「へえ」

ギルドって冒険者ギルドみたいなものだろうか？

でもお姉さん達、装備らしい装備は一切持ってないんだよね。

貫頭衣の私より際どい姿。

もう紐じゃない、これ？

それくらい肌の露出が多くて目のやり場に困る。そんな格好で。

もし私が男のままだったらきつと大変なことになっていただろう。

「ようこそ、ミナリギの町へ」

「ただいま」

「おかえりなさい、ミーア。その子が？」

「そうだ。多分迷い子だ。親の姿は確認できなかつた」

「そうかい。その子だけでも確保できてよかったよ。よくきたね、

我々は君を歓迎するよ」

暖かな声。格好はミーアさんと同じくらい際どいけど、門番のお姉さんは包み込むような優しきで私を迎え入れてくれた。

というか顔面におっぱいが迫って柔らかい海で窒息しそうになった。

そうか、ここが天国か。いい所だね。

安楽死させてくれるんだと意識を失いそうなところで引き剥がされる。

「ダメだぞ、この子はうちで引き取るんだから」

「ケチー、ちよつとぐらいいいじゃないの」

門番のお姉さんとミーアさんは視線を切り交わしてバチバチと火花を散らした。

それをどうしていいか分からず戸惑いながら見守る。

「ほら、こつち来な。馬鹿の近くに居ると馬鹿がうつるから」

「二つて、誰が馬鹿だ！」

門番さんとミーアさんの声が被る。

喧嘩するほど仲がいいのかもしれない。

それか喧嘩は同じレベルでしか怒らないいい手本なのだろう。少し素っ気ないリヤナさんに手を引かれ、一緒に歩いた。言葉では少し距離がある気はしたが、ただ不器用なだけなのかもしれない。

その場に残したミーアさんを置いて私はリヤナさんとある場所に向かった。

そこは木造の建物にしては大きくて、中に入ればいくつもの個室に分けられていた。

中からは悲鳴のような喘ぎのような声が聞こえてくる。発現場だろうか。

「あの、ここは？」

「分娩室よ。あたし達ハンターは異形と交わり、種を摂取してここで子を産むの」

「そんなすぐ出産できちゃうんですか？」

前世の知識では十月十日、母体と共に成長するのが出産に至るまでの苦行と聞く。

しかしこの世界は成り立ちからして違うのだろう。

なにせ相手は異形で、人間とは違う成長速度を持つからだ。

「ま、あたしはスキルがあるからね。見てなさい」

リヤナさんは台の上で寝そべり、お腹に手を当てスキルを唱えた。

「孵化の促進」

あ、それ私も持つてる奴だ。

リヤナさんのお腹はみるみる膨らんで、表情も苦しそうになる。

さつきまでのスレンダー体形が嘘のように出産間近の妊婦に変わった。

促進にしたって急すぎる。

んぎぎぎ、と本当に苦しそうなリヤナさん。

私は彼女の手を握り、頑張つてと祈ることしかできなかった。

瞳には涙が浮かび、その直後ゴロンと大きめな卵が足元に転がった。

これが異形の子供？

ってどうか卵だ。薄紫の表面に、どこかグロテスクさを感じた。
リヤナさんが起き上がる。

もう体調は大丈夫なのだろうか？

おろおろするしかできない私に、ポンと手を置いた。

「不安にさせちゃった？ けどね、ここまでしないとあたしらハンターは食つてくのもままならないんだ。ギルドはね、この卵を買い取ってくれる所なんだよ。それを賞金と取り替えて生計を立てるんだ」

「じゃあギルドって産んだ子供を育ててくれるんですね？」

私の質問にリヤナさんは困ったような表情をした。

それだけで察する。

違うんだ。この卵の行き先は、もつと違う場所。

この世界の人間はそうやって生きながらえてるのだと言外に言われた気がした。

「そうだったらいいんだけどね。大概は野に帰しちゃう。新しい異形が誕生するのが実情だ。それでも人類はそんな偉業と共に歩んでいく事を選んだんだよ。全部が全部、人類の味方になってくれるわけではないと知っていながら、ね」

リヤナさんは泣きながら私に言い聞かせる。

いや、自分に言い聞かせるのかもしれない。

こんな理不尽な世界、素面のままでは生きていけない。
人間と異形。

本来相容れない存在の私達は、それでも生きる事を諦めなかった。

「酷いぜお前ら。あたし置いて先に行くなんてな。あたしもパッと産んできちまうかな？」

少しして合流したミアさんが明るい口調でそんな事を言う。

これがこの世界の日常とでも言うように。

私はその事実を耳を塞ぎたくなる。

「どうしたエト？ お前顔が青いぞ。あ、リヤナに脅かされたな？」

「違うんです。私、産んだ子は一緒に育てるものだとばかり思ってい

たので。それで」

「そっか、この世界の在り方を知っちまったか。幻滅したか？」

どこか消沈するように声が沈むミアさん。

私は頭を振る。

「いえ、ただ……少し情報を整理する時間が欲しいです」

「そっか。じゃありヤナ、先に宿に帰ってエトを休ませてやれ。あたしは卵産んだらギルドに行って換金してくるわ」

「じゃ、ついでにあたしの分も頼むよ？」

「しゃーねえ、まとめて換金してきてやるよ。でもぜってえお前のよりでかい奴産むから」

「ほう？。あたしの記録を越えられるとでも？」

いがみあうミアさんとリヤナさん。

まるで生まれた卵の大きさに競い合ってるようだ。

もしかしなくても大きければ大きいほどもらえるお金が上がっていくのだろうか？

まだよく分からない。

わかりたくもない。

そんなやりとりの後、宿に入った。

私が追加で入ったところで料金が加算されないみたい。

別に何人が増えようが部屋一つに大金は変わらないようだ。

ふんわりとしたベッドへとダイブする。

ふかふかの布団は気持ちがいい。

リヤナさんは何かの香を焚き始め、何故か服を脱ぎ始めた。

「あの？。なんで服を脱いでるんです？」

「ん？。これからすることに邪魔になるじゃない？」

「これから何かするんですか？」

「ふふ、そうねえ。なんだと思う？」

ずい、とリヤナさんの顔が私に近づいて、そのまま唇をちゅう、と吸われた。

「あむ、ん、ちゆる、はぷ」

「んふふふ。いいじゃないか、あんた。随分と素質があるね、れる、じゆるるるる。上手だよ？ 夢中になっちまう」

キスだ。それもディーブな方。

もちろん初めてで、いつのまにか主導権を握られていた。

息をするのも億劫なほど、唾液を流し込まれていく。

「こく、こく。ふは」

「すっごいえっちな顔してるよ、あんた。自覚ある？」

「ふえ？」

「無自覚でこれかい。本当に、迷い子が疑わしいね」

私、まだリヤナさんに疑われてたんだ。

でもどうしてキスなんて？

疑われてたらずしてこないと思うし。

「ふふん、状況がわかってないようだねえ。エト」

「え、はい」

「人間が宿に入ったらすることは限られてくるよ」

「寝る以外に何かあるんですか？」

「そりやあるよ」

「それって？」

「セックスさ。異形以外でもね、悲しいことがあつたらセックスをして記憶を消しちまうんだよ。あんたが今感じてる痛みも全部トロトロに溶かして忘れさせようって寸法さ」

「あ……」

じゃあミーアさんが先に宿に帰って休めと言うのは……

セックスして私の不安を拭い去ろうと、そう言うこと？

私、全然そんなこと考えてなかった。

今リヤナさんがこうしてるのは全部、全部私の為で。

「私の為に、そこまで……」

「大将が家族と認めちまった以上、あたしとしてもあんたには悲しい顔を浮かべて欲しくないんだよ。悪く思わないでくれよ？」

「はい……ふあ♡」

リヤナさんの指が、艶かしく私のデリケートな部分に添えられた。

女同士だからこそわかる、造形。そして労るような触り方で感度を
じわじわ高められていく。

「あん♡　そこ、気持ちいいです♡　は、は、はあん♡」

「可愛いよ、エト。あんたのここ、真っピンクでツルツルなのに指が三
本入るくらいに広がって、それでいて締め付けも最高だ。わかるかい
？　この場所」

「あん♡　あん♡　あっー♡♡♡♡」

その部分をカリカリと引つ搔かれると、無意識に腰が跳ね上がっ
た。

内側の、入ってすぐの場所。

ちようど陰核の裏側。じんじんと痺れた底が、ちようど陰核に振動
を伝えるように脳を蕩けさせる。

「よかった。ちゃんと感じられてるね。あたしもイク時はここを擦っ
て達してるんだ。触ってごらん？」

ベッドで二人、抱き合って。体を寄せ合って、指定された場所へ指
を差し込む。

「自分で触られてる場所はそこかい？　ここだよ？　分からないかい
？」

「ひゃうん♡　はー♡　はー♡」

無理だ。意識がまとまらない。

指に意識を向けようとした先から達せられる。

全然敵わない。リヤナさんしゅい。

「ふふ、感度が強すぎるのも困りものだね？　これじゃあ異形にされ
るがまだ。大将が放って置けないのもわかるよ」

それって、私が全然役に立たないって意味だろうか？

セックスって無抵抗のまま犯されるだけじゃダメなんだ。

「ふふ、顔トロトロになってる。こんな子供の遊びみたいな前戯で
イッてちゃ先が思いやられるよ？」

「らって、初めてなんれすもん♡　こんなふうに触られたことも、
ふう♡♡♡」

また達した。一度達すると断続的に達してしまう。

感じやすいのはわかってたつもりなのに、この人すっごいテクニシャンだよお。

負けっぱなしの私はグズグズと泣き出すくらいしかできなくて。

それでも涙を舐めとるように舌を這わせて顔中唾液でベタベタにされた。

舌の感触がまるで別の生き物の様で変な気分になる。

泣きたいのに泣かせてもらえない。

いや、さつきからずっと喘いでいるけど、そう言う鳴き声じゃなくて。

なんて言ったらいいのかな？

悲しい涙は流させてもらえなかった。

全部が全部嬉しい感情にすり替えられていく。

脳みそがそれしか考えられなくらいにとろとろになって、私は達する事だけを義務つけられるマシーンになった。

抵抗なんてできない。

力でも敵わないのに、それ以上に快感が駆け抜ける方が先で。

気づけば夢中でキスをしていた。

ずっとリヤナさんの掌の上で。イクっぱなしだ。

恥ずかしくて顔を真っ赤にしながら夢の中へと旅立った。

そして目が覚める。

意識が覚醒すると、昨日までの悲しみが嘘の様に晴れ渡っていた。

セックスによって上書きされてしまったみたいだ。

この世界の住人にとつてのセックスは生きるための強かさ、それ以外の要因が組み合わさっているのかもしれない。

裸で抱き合って寝てるミアさんとリヤナさんに布団を掛け直し、

私は自分の今後の事を考え始める。

■ステータス

ネーム：エト

職業：無職

年齢：11

レベル：2

称号：1-1

■割り振りポイント：10

技量：6

耐久：70

精神：80

魅力：10

■装備

なし

■スキル

魅惑の掛水／射程10cm、命中時相手の好感度特大

混種の抽選／複数の命を用いて新しいアイテムを創造する

孵化の促進／入手した種を素早く育てる。残機1消費

■取得種

◎ホワイトスプラッシュスライム〈希少種〉

寿命が短く、発生して間もなく死に至る生存力の弱さから絶滅危惧

種扱いをされている。

その種は今ももういない男の精液に酷似しており、大変貴重。

出産の機会があつたら子を引き取りたいと名乗り出る里親多し

■残機：3／3

ステータスを見ると、技量に少しの変化が見られた。

人間同士でもステータスって上昇するんだ。

って言うか、このステータスってセックス前提のものだと思いきる。

武器で戦うなんてしてないもんなあ、この世界。

耐久値って何を意味するんだろう？

私リヤナさんのテクニクに抗えずにすぐ寝ちやった記憶しかないもん。

そういえば割り振りポイント振ってなかったなあ。
技量が何を意味してるか最早疑うまでもない。

ただ数値の低い魅力も気になるといえば気になる。

取り敢えず技量に＋10振った。焼け石に水だと思うけど、低いままの現状を放置して良いことにはならないだろう。

■割り振りポイント：0

技量：16

耐久：70

精神：80

魅力：10

これでよし。

そう言えば装備欄何にもないな。

そこでようやく服を脱がされて全裸だったことに思い至る。

リヤナさんに無理やり脱がされたんだっけ。

貫頭衣だから一枚の布に首を通す穴開けて腰あたりで紐を括った
だけなんだけどさ。

それでも裸なのは恥ずかしい。

恥ずかしいんだけど、全裸で寝そべる二人の女性がいるあたりで気
にするだけ無駄だと思ひ知る。所々えっちなお汁で濡れてるもんね。

無性にお風呂に入りたくなる。

そもそもこの世界にお風呂があるかも分からない。

元日本人の悪いところが出てくるかな？

「ふぁーあ、おふぁようエト。お前起きるの早いな。ちゃんと寝れた
か？ んー？」

起き抜けにミアさんが背を起こしてベッドの上で大きな欠伸を
した。

その際覆い被さっていたリヤナさんを押しつけていた。酷い。

リヤナさんはベッドから落ちて頭を床にぶつけていた。

しかし眠りが深いのかそれでも起きそうにない。つよい。

「おはようございますミアさん」

「ミア、で良いぞ。これからあたし達は家族になるんだからな
「はい」

そう言えば昨日もそんなこと言っていたっけ？

本当に出会ったばかりの私を引き取ってくれるつもりなんだ。

なんて良い人なんだろう。

「それよりも昨日はどうだった？ リヤナに虐められなかったか？」

「すごく、よくしてもらいました。色々びっくりすることも多かった
ですけど」

「そりゃよかった。こいつは技量の高さで異形を出し抜く奴だから
な」

「数値はどれくらいなんですかね？」

「確か3桁行つてたと思うぞ？」

「3桁……」

それは勝てない訳だ。

私の数値が低すぎたのだ。70で高いと思つたのがそもそもの間
違いだった。

「そんな凹むことないぞ。こいつの親がそう言う異形と寝てばかりい
る女だったつてだけだ」

「お母さんの影響で子供のステータスが変わるんですか？」

「そりゃそうだろう。どの異形と寝たかで子に継承されるステータス
に差が出るもんだ。あたしの母さんは耐久よりでさ。きつとドM
だったに違いない」

「ドM……」

待って、耐久つてそう言う意味？

アブノーマルな攻めに耐えられる素質とかそう言うやつなの？

それ以前に異形とえっちする時点でアブノーマルの塊だよ。

「それで？ エトのステータスはどんな感じだ？」

「わ、割と普通だよ。特に特徴っぽい特徴もないし！」

「ほんとかあ？ 目を泳がせてるあたりでバレバレなんだけどよ！」

ガバリ！ と突然覆い被さってくるミーアさん。

「まあ口から聞かなくても直接体に聴いちまえば手っ取り早いんだけどさ」

「ひえー」

結局その後も私はミーアさんに良い様に喘ぎまくるハメになる。

攻め方は十人十色。

リヤナさんがテクニクタイプなら、ミーアさんは力技だった。

「エト、貝合わせって知ってるか？」

「これから行うことでしょうか？」

足をクロスにして、下腹部を接触させた状態で聞いてくる。

リヤナさんの時とは違い、お互いにベッドに寝た状態。

リヤナさんの体は完全にベッドの下に追いやられていた。酷い。後で怒られなきや良いけど。

「やはり知識はあるか。だが経験はない、と？」

「そりやそうですよお」

「ならあたしが教え込んでやるよ。女同士のまぐわいつて奴をさ」
ずりゆっ、ずりゆっ。

それはゆっくりと前後運動するような動きで持って始められる。

直接手で触られるより弱い刺激で、昨日リヤナさんとした時とは違う、そこまで気持ちが良いものではなかった。物足りなさが焦りを生む。

もつと気持ち良くなりたいたいと自分でも腰を振るが、望んだ快樂は得られずじまいだった。

「さて、その余裕顔がいつまで持つか見ものだな」

「リヤナさんに比べたら全然余裕ですね」

「やっぱりお前耐久高いだろ？」

「な、なななんの事です？」

「さて、なんの事だろうなあ？」

ニタリ、とミーアさんの唇が三日月を描いた。

突然、接触部分に異物の感触。それらは震動しており、密着したその場所を縦横無尽に駆け巡った。ただの貝合わせの中に放り込まれ

た異物はいったいどこから出てきたのか？

考えるまでもない。ミーアさんの内側からだ。

「んひっ♡」

その石が、デリケートな部分で最も繊細な陰核に触れた。

内側からの痺れに抗えない私が、表面上の痺れに抗えるわけもなく腰を浮かす。

「早速震石の洗礼を受けたな？　どんどん増やしていくぞ？」

「待ってくらはいい、これ、一個じゃないんれふか？」

「最大6個。あたしは常に持ち歩いてる♡」

「んひひひひひひ♡」

一個でも辛いのに、一個、また一個と増えていく。

誰だ。これが昨日に前戯にも満たないお遊びだと言ったのは。

そうだよ、私だよ。思い込みから適当な事を言ったのは私だ。

ミーアさんが普通の人なわけがないのに、昨日以上の快樂はないものだと決めつけていたんだ。うう、私のバカバカ。

日頃から異形とセックスしまくってる人種がまともなわけなんじゃないのに。

結局一時間も持たずに意識を失う羽目になった。

耐久レースはミーアさんの圧勝だ。

テクニク勝負はリヤナさんに軍配が上がるが、アイテム勝負だとなかなか良い試合なのが少し悔しい。

私が目を覚ました時、ミーアさんが私の髪を優しく撫でていた。

「お、起きたか」

先ほどまでの出来事が嘘の様にその笑顔に見惚れそうになる。

「さつきは悪かったな、興が乗ると止めど気を失っちゃうんだ。本当はさ。エトにあたしなりのオナニーの仕方を教えてやりたかっただけなんだ。でもこの震石って耐久が高い奴以外にはウケが悪くてさ。だからエトがあたしと同じなら良いなって、ホントごめん」

そこには申し訳なるくらいの謝罪の感情が載せられて、私はただ頭をふる。

「いえ、正直に白状しなかった私も悪いんです。ミーアさんのオナ

「ニー道具。私には少し刺激が強すぎました」

「そっか」

「だから、その。もしよければですけど」

「ああ」

「私に色々その道具を教えて貰えませんか？」

「勿論だ！」

いい笑顔で、ミーアは笑う。

彼女はその見た目から非常に乱暴者と思われがちだが、ただ不器用なだけなのだと思い知る。その姿は前世の私と駄々かぶりで、そんな笑顔を向けられたら許すも許さないも無いと思った。と言うか、もう少し会話しませんか？

彼女が何かと行動から入るのは、単に言っただけで聞かせるより行動で知らしめた方が早いと思っただけだろう。

そう言う環境で、そう言う世界で。

私には考えもつかないルールの中で生きてきたから、不器用な彼女は周囲に誤解されてしまっているのだ。

右も左もわからなう私から見てもそう思う。

「ん、んん……あれ？　なんであたし床の上で寝て……痛っ」

ベッドの下から声が聞こえた。

リヤナさんが起きたんだ。

ベッドから落とされた時に頭を打ったのか、その場所を押さえつけ

ては「確かベッドの上で寝てたわよね？」と状況確認に勤しんでいる。

「ようやく起きたか寝坊助め」

「大将にだけは言われたくないわね。エトもおはよう。ふぁーあ」

「おはようございます、リヤナさん」

「ん」

そのあと三人裸のまま宿のシャワー室を借りていろんな汚れを流した。

そこにはいろんな特徴を持った人(?)がいて、驚いたのを覚えている。

人類側に与している、といっても100%人げとは限らない様だ。
「あんまりジロジロ見るのは失礼だからやめろよ？ あいつらだって
好き好んでその姿で生まれたわけじゃないんだ」

「あ、はい」

それでも人類にエントリーしてる女性は私の視線など気にした風
もなくシャワーを浴びていた。不躺な視線に慣れているのだろう。

異形と共存している世界では、どんな姿で生まれくるかも運任せ
なのだと言われて私の生む子はどんな姿なのだろうとちよつぴり心
配になった。

ミーアさんに拾われて、数日が経つ。

「あん♡ あつ♡ あつ♡ あつ♡ あつ♡ あつ♡
♡」

毎日のように可愛がられて、そして今までもらったことのない愛情を身一つで貰い受ける。

女性同士のまぐわいという形だけど、その歪な愛情が気絶を繰り返すほどもどかしくて、だがとても満たされるのは、私がそれを求めてやまないからなのだろうか？

わからない。が、結果が全てのこの世界。

自分の感情を大切にしていきたいよね。

「ああ、エトが今日も可愛いな。こんなにも幼いのに、すっかりメスとして種乞いがうまくなってる。こりゃあ相手する異形もほつとかないぞ？」

世は決して豊かではなく、人の命は安い。

いつ知んでしまうかも分からないほどに現実は過酷で、死と隣り合わせである。

だからこそそうやって肉体を張り合わせて愛を語るのだ。

そう思い込めばやや激しめなスキンシップも好意として受け止められた。

それはさておき。

数日で私の困った事情が発覚する。

それは達した時、高確率で小水をお漏らししてしまう事だ。

事前に水分をたっぷり飲んだ覚えがなくても。

弧を描くように緩やかに湾曲を描き、それが当たった人物から過度に愛される事が発覚した。

最初は私の境遇に同情してからだと思っていた。

けれど日を追うごとにリヤナさんやミーアさんの様子がおかしくなり始め、ようやくそれがスキルの効果であることを自覚した。

スキル『魅惑の掛水』

射程の短い理由は放尿という形だからなのだと理解させられた。
発動条件は達する事。

その過程が私の満足度によって決められており、満足すれば満足する程に発動率が上がり、重ねてかける事で一晩でも二晩でも私の気持ちに関係なく愛情を注がれるのだ。

だからここ最近はずっと正常位ではなく後背位でお願いしている。

これ以上おかしくなれると私の身がもたないからね、うん。
されるのは嫌いじゃないけど。気持ちいいからね。

でも男と違って終わりが来ないから向こうの体力が続くまでずっとなんだよ。

そこがちよつと厄介かな？

いやね、お願いしてこなくても触ってくるんだよこの人達。

まるで私の声を聞くのが目的みたいで、その声を聞くためにエッチな声を聞いている。

要はお気に入りのミュージックを聞く感覚で襲ってくるのだ。

娯楽が知れしかないとはいえ、頻度が高すぎて体力的にきついです。

それだけ愛されて幸せじゃないのかと思うだろう？

しかしそれが己のスキルが発端だとわかると微妙な気分になってくる。

二人には悪いが、私はそこまで可愛げのある性格をしていない。

だから、うん。

私はただ手放して愛されるだけの現状から一步踏み込んで愛してあげる側に立とうと心に決めた。

のだけど……

「エトの気持ちはすごく嬉しいよ。でもね、あたしらの愛は見返りを求めてなんていないんだよ」

「ひゃう♡」

ミーアさんに背中にしなだれかかられて、耳元にふつと息を吹きかけられた。

それだけで背中がゾワゾワし、腰が砕けていく。

「そーそ♡ エトは難しく考えすぎちゃうのが悪い癖だわ。もつとアヘアへにしてあげなきゃダメなのかしら？ んちゅ、れる」

「んっ ふ——」

リヤナさんは私の真っ向から顎を引くと、そのまま唇を重ねてくる。

唾液を纏わせた舌で私の舌を絡ませると齒列をなぞるようにかき回した。

こうやって私は少しづつ抗う気力を削がれ、いつも喘ぎ声を上げる始末である。

決意の失われることのなんて早いことか。

とはいえこれは女の体になってからの感じ方の違いも大いにあるた。

ただでさえ感じやすいのだ。

そこに付け加えさらに敏感なウィークポイントを開発されたら、抵抗するのも馬鹿らしいくらい手のひらの上である。

悔しい、でも感じちゃう。

こんなフリーズの通りに私の感情は荒波に流された。



もちろん、事後に説教をしましたよ。

お話も出来ないのではこの先やり込まれるのが見えているからね。ただでさえ養ってもらってる身の上。

私だって二人の役に立ちたいのだ。

無知であろうとなんだろうと。そう思うのは迷惑だろうか？

質問したら困惑されてしまった。

「エトはさ、何であたしらがこうしてエッチなことを続けていると思っ
っ。」

「私が悩まないように気を逸らしてくれてるものだと思っていました」
「半分正解よ。でも半分不正解」

「えと、それじゃあもう半分は？」

「あたしらハンター稼業は体が資本なのは知ってるだろう？」

「はい。異形から種を貰い、子を産み落とすのが生業の命懸けの仕事と聞いてます」

「うん。だから今エトに仕込んでるのはいずれハンターになっても困らないようなレッスンも兼ねてるんだ。ちよつとやりすぎだと思われてるけど、あいつらこっちの感情お構いなしで種付けするから。だから今のうちにその一端に慣れてもらおうと思つてさ。少しづつハードにしてるのよ」

「えっ」

そうだったの？

にしては何やら道具とか使つて本格的だったけど。

リヤナさんとか目の色変えて私に口では言えないあーんな事やこーんな事をしたのはその延長線上だったと？

ならば私からはとやかく言えないか。

向こうの目的が私の愛玩化だったら断固拒否すべきだろうけど、そういうことならまあ。

「分かりました。私が間違つてました」

「分かつてくれたか！」

「私だつてミーアさんやリヤナさんに拾われてなければ今頃異形の苗床でした。今こうやつてコミュニティに匿つて貰えてるのはお二人のおかげでも有ります。そして今回のことは未来の私への貯金として受け取っておきます」

「じゃあこの道具を使うのも許してくれるか!？」

リヤナさんが取り出したのは細長いチューブ。

その先に水槽があり、魔力を通わせて水を注ぐことができるホースのようなものだ。

その注入口は私のお尻。

リヤナさんは何回も私にアナライキの良さを語ってくれるが、常々

突っぱねている。

個体によつては子宮以外も拡張されると経験談を語ってくれるが、ミーアさん曰く稀だそう。リヤナさんは運悪くその個体に当たり、開発されてからハマってしまったそうだ。

曰く同士を求めているのだが、その矛先が今現在私に向いているのだ。

いい迷惑である。

「それは嫌です。断固拒否します！」

「そんなあ」

「諦めろリヤナ。お前の変態思考についていける女はこの町にいない。エトもそのうちの一人だったということだ」

「だって、アナルで感じられる逸材だよ？ せっかくの素質ありをこんなところでミスミス逃すだなんて。じゃあアナルバイブならどう？」

「それでしたら、まあ」

「よっしゃー！」

お腹をぱんぱんにされるのに比べれば、まだ気持ちいい程度で済む。

バイブとは震石の事で、それをより加工してイボイボにしたものを指す。

ミーアさんは原石のまま使うが、リヤナさんはまた拘りがあるのだそうだ。

その拘りが強すぎて私が酷い目に遭うのがここ数日で判明している。

ご飯を食べたりお風呂に入る以外はほぼエッチ三昧。

二人がお仕事中は唯一の睡眠時間。

ただし二人が帰ってくるのと強制的に起こされるんだけどね。

「痛くしない約束ですよ？」

片足を椅子に乗せて尻の穴を見せるように皺を伸ばす。

すっかりリヤナさんにここ数日で広げられてしまったアナルは、バイブをするんと飲み込むと直腸をゆつくりと登っていった。

その震石が震えるたびに熱い吐息が漏れ出る。

リヤナさんが私の顔を見て興奮気味に問うて来た。

「やっぱりもう一つ追加しても?」

「ダメです。前に許可したら一個二個じゃ済まなかったじゃないですか!」

「うっ」

「その代わりに、こっち側も満足させてください。アナルバイブを受け入れたんですから、ね?」

すっかり開発されてしまった女の証を、摩りながら開いて誘う。

私はすっかり淫らな女の子になってしまった。

11歳でこれでは先が思いやられるよ。

いや、こんな世界だからこそこうすることでしか延命できないのだ。

何故か私の誘いに鼻血を拭きそうなほど興奮するお二方。

同性なのにおかしいな?

「むほー、エトからのお誘いだぞ、おい堪らん」

「待てミーア。あたしは今すぐにでも押し倒して孕ませたい気持ちに囚われてるがひとまず待て」

「奇遇だな、リヤナ。あたしもだ」

おかしい。こんな小さな少女の痴態など見慣れているはずだろうに。

スキル以外の要因があるのだろうか?

とんでもなく身の危険を感じる。

おそらく別の世界でゴロツキの男と遭遇した時のような貞操の危機のようなものだろうか?

とつくに失ってるというのに忌避感が肌にとわりついてくるようだ。

ギラギラとした視線が身体中を舐め、私の心臓を強く脈動させた。

ミーアさんが蛇のように手をしならせ、私の膨らみかけの乳房に触れる。

まだぶつくりとし始めた、仰向けにしたら消えてなくなるその場所

をなぞるように輪郭を露にさせる。私に形を伝えるかのようなその触り方は、くすぐったさの方が若干勝る。

その何と気恥ずかしいことか。

何だったらもつともみくちやにしてくれた方がなんぼかマシだが、この人は私を焦らしているのだ。自ら懇願するように仕向けて、己の気分を高めている。

まるでこれから女を犯す男のような振る舞いをして見せてくる。

その様子が少しおかしく。

「んっ♡」

それでも触られ続けたらくすぐったさが気持ち良さに塗り替えられるもので。

ただでさえ深い絶頂から目覚めたばかり。

熱った肌は冷め切らず、感度は乳房に宿り続けた。

一番敏感な乳首は一向に責めず。

もう少し強い感度が欲しいところ。

その焦ったさが私をより困窮させる。

もつと触つてと言葉を発させようとしてくる。

空気を求めるように開いた唇から舌が飛び出た。

唾液を含んだ舌で、乾いた唇を舐め回す。

「ね、ミーアさんお願いがあるの」

「なんだ？ エトはあたしにどうされたいんだ？」

乳房をこねくり回しながら聞いてくる。

輪郭を描くような、回りくどい触り方で。

「乳首」

「乳首を？」

「つまんで、噛んで、いじめてほしいの」

「嫌だ、と言ったら？」

ハア、熱の籠った吐息が乳首にふきかかる。

ゾワゾワゾワ、と背筋が痺れた。

まるで乳房全体が性感帯であるかのような錯覚。

私は眉根を寄せて瞳一杯に涙を溜めた。

生殺しである。

開発され尽くしたおまんこを見て見ぬふりして、あまり感じないアナルや乳房へ意識を寄せなければならず。

そして熱を伴う唇は、紅を引いたように赤く、扇情的にミーアへと誘いの言葉を掛けていた。

「意地悪されすぎると泣いちゃうかも」

「冗談だよ、エト。お前に涙は似合わない」

ぺろぺろと、涙を舐め取られてそして唇を合わせ……ない。

微妙な距離感で、舌を突き出して絡める。

たったそれだけの切ないやりとり。

強引なディープキスに慣れ切った私の舌は虚空を切った。

求めた感触を全て止められて、再び物足りなさが体全体を襲う。

脈動する陰唇。くぱくぱと開いては涎を垂らしている。

早くその場所を触って欲しいと肉体が求めているようだった。

「この距離だとエトの可愛い顔も丸見えだ」

「いじ、わる、しな、いで♡」

「そう言いつつも、感じてるんだらう？」

言い返せない。その通りだ。

瞳はミーアさんに釘付けで、膣全体が早く太くて固いものを突き入られてくれと懇願するように脈打った。

心臓は高鳴り、背筋はゾワゾワと痺れを纏い。

「うう、バカあ♡」

「ほんと、エトは可愛いなあ。アタシがオスならお腹がパンパンになる程種をつけてあげるのに」

「うん、ミーアさんの種なら欲しい。私の一番奥に部屋、いっぱいになるまで注いでくれるんだよね？」

「ああー」

誘いかければ領いて、鎖骨あたりで舌を這わせた。

「あん♡ はっ、ああ♡」

「もうここまで来ると全身性感帯だね、エトは。こりゃ異形もぞっこんだ」

合わせ鏡のように顔の前で両掌を合わせ、指を絡ませる。ミリアさんの熱を感じるたびに、私の呼吸は荒くなる。幾度も達しかけた。

まだペツティングの段階なのに。

愛撫だけで何回も意識を持っていかれる。

もしこの先、本番があつたなら。

どうなっているかわからない。

これより凄いのがくる？

それを思うと興奮する自分がいた。

「残念だけど、異形の前にアタシがエトを孕ませるから♡」

抱きすくめられて、背中越しに強い感情を吐露される。

もうそれだけで感無量で。

もしそうだったらどれだけ良かったかと何度も思った。

それぐらいに、蠢く中心を道具で愛撫されたのが気持ちよくて。

私は何度もスキルを発動させては床を濡らした。

これ、床には反応しないよね？

余計な事を考えつつ、不意に頭に電子音が流れ込む。

この世界でいうところの神の祝福だと聞くけど、今更私に何の用だろうか？

種をもらうような行為などしてはいないはずだ。

普段は意識が飛んでる間に勝手に増えるステータス。

こういう呼びかけは初めてのようなの？

《アイテム／素材：成長促進剤「ミリア」を獲得しました》

このアイテム単体では何の効果も得られないが、すでに獲得した種と混ぜ合わせることで新たなアイテムを獲得することができる。

混種の抽選用アイテム。

「んにゃ!？」

「どうした、痛かったか?」

「にゃんでもないです」

一気に熱が覚めた。

うえ？ 女性同士でもそんなもの手に入るの？

まるで私の為に用意されたスキルみたいだ。

早速ステータスを弄ってみる。

「ならいいが、続けるぞ？」

「ふあい♡」

触られたら、やっぱり気持ちよくて。

私はその気持ちよさに耐えながらスキルを発動させた。

というか、条件を満たしたのでスキルを発動しますか？のイエスボタンを念じただけである。

すると何故だか私の下腹部に、男だった時のあの感覚が蘇ってきて

……

「ふええええ!？」

「どうした!？」

またミーアさんの愛撫を中断させてしまった。

生まれたのはミーアさんもよく使う張り型にそっくりで、しかしその真つ白な表面には見覚えがあった。

シロだ。

初めて処女を捧げたあの子の決死の姿によく似ていたのだ。

けれどその状態のシロは記憶を保有しておらず、私の感情にオスが宿っていない事を知るや否や床にべちよりと落ちてしまった。

そしてずりずりと宿主を探すように床を這いずった。もう張り型の形はとつてない。

いつものまるまった形状だ。

その異変にミーアさんも身を翻す。

「異形!? 一体どこから入り込んだ!？」

「わー、わー! 違ってですね。これ、私のスキルで生み出したものです」

身振り手振りで危険がないことをアピール。

よもやこんな事態になろうとは思いませんでした。

情事中のアクシデントである。気分が萎えるなんてもんじゃない。

不信任感が拭えない瞳は初めて発見された時と同様に、私の体を舐め回すように見ていた。

「スキルで？ エト、お前は一体……いや、それよりもどう見たってそれは異形だろう？」

今や張り型の形状のとなつてないまんまるなボディは当時のシロを彷彿とさせた。

弱々しく、放っておくとすぐに死んでしまうあの子。

きつと人の体に寄生することでしか生きていけないのだと、何故かそう思った。

「ずっと、用途のわからないスキルがあつたんです」

「ああ、スキルなんてものはそんなものだ。だいたいそのときになんなきや発現せず、さりとて本人にとつて有用かもわからないものばかり。それでもあたし達はそいつをうまく使つて生き抜くしかない。しかしそれがどうして急に開花した？」

開花する条件は主に異形にいたぶられてる時が殆どだ、とミーアさんは漏らす。

「どうやらミーアさんの熱い感情に反応したみたいですよ。私を孕ませてくれると囁いたでしょう？」

「ああ、その気持ちに偽りは無い。あいにくと女の身体じゃ実現は不可能だが、気持ちだけなら負けないつもりだよ」

「それで私の内側にあつた種とミーアさんの思いが共鳴して」「それでそいつが生まれたと？」

そう言えば、と。

私の喘ぎ声を聞いて搜索していたことを思い出したのかミーアさんが私の全身を再度見た。

迷い子と断定していたにもかかわらず、すでに異形と接触した後だと言う事をすっかり忘れてしまつていたかのように顎をさすつて唸っていた。

「はい。この子は私が意識を覚まして初めて出会った友達なんです」

「友達？ 異形だぞ？ あたしら女にタネをつけることでしか生存本能を発揮できない怪物だ。意思の疎通を期待するだけ無駄だぞ？」

「それでも、この子を見つけて私は見捨てられなかった」

「エトがそこまで気に入ってるなら仕方がない。それより個体名を知ってるか？ それによってはギルド側の裁量に任せなきゃならない。エトが家族として扱っても、ここにはこのルールってもんがある」

「ホワイトスプラッシュスライム。希少種だとステータスに記載されてました」

「リヤナ、聞いたことあるか？」

「スライム種にそんなのいたか？ アタシは知らないぞ」

二人は首を傾げながら自分の知識を確認しあってる。

あれ、この様子だと本当に知らないみたいだ。

「そもそもこの辺にスライムとか居ないし」

「ああ、粘体生物が生存するのにはちと環境が厳しいものな。生息圏はもつと南の方じゃないか？ こちら辺はプラント種の縄張りだ。

あの鬱蒼とした森は全てプラント種のオークだぞ」

「そうだったんですか？」

「ああ、てつきりその被害者だと思って保護したんだが、よもやスライム種の被害だとはな。一応ギルドに相談しに行くか」

「え、アナルプレイは？」

「お預けだバカ」

ごち、とりヤナさんの頭頂部に拳骨が落とされた。

◇

場所を移してギルド。

ここでは数多の妊婦が通い詰め、生まれた子を現金に変えて生計を立てる女が集う場所である。ミーアさん達は流れてるのかギルドに入るなり一目置かれていた。

それよりもつれてる私に視線が集まるのが気になる。

門番さんには歓迎されてたけど、他の人にはそうでもないのかなと急に心配になった。

「ギルマス、居るか？」

「あら、ミアアじゃない。今日は依頼を受けないって聞いてたのにどうしたのよ？」

ギルマスと呼ばれた女性は男だったら100人中100人が振り返るような美女で、きっと男性経験も百戦錬磨の猛者、と言うオーラをビンビンに匂わす女性だった。

色気がムンムンと言うか、ミアアさん達もエロい体つきをしてるが、この人の場合は体つきからして違う。格の違いというのを見せつけられた気持ちだ。

急に恥ずかしくなる。

「ウチのエトがさ、どうもスライム種に強姦されたらしくて」

「スライム種に？ おかしいわね。近隣ではプラントしか居ないはずよ。一体そいつはどこから来たのよ」

眉尻を寄せ、私の体をじろじろ見ながら苦悶の表情を浮かべる。

「と、紹介がまだだったわね。ようこそいらっしやい。未来のハンターさん。あたしがこのギルドを統括するマスターのシャリファよ、よろしくね？」

180。態度を改め、満面の笑みを浮かべるシャリファさん。

「エト、と名付けられました。よろしくお願いします、シャリファさん」

「あら、お行儀がいいのね。ミアアとは大違い。いい拾い物したじゃない？」

「うるせーよ。それよりギルマス、ホワイトスプラッシュスライムという個体名に心あたりは？」

「待って、今なんて？」

ピクリ、とシャリファさんの眉根が上がる。

「ホワイトスプラッシュスライム、だ」

「絶滅危惧種よ、何故そんなものが近隣に？」

「実際に乱暴されたエトが確認してるんだ」

「種は？」

「エト、種は後どれくらいある?」

種、と聞いてもピンとこない。

こういうのは一度使えば消えて無くなってしまふものではないのだろうか?

そこでステータスを再度確認すると、思った通りステータスからは消えていた。

代わりに獲得アイテムにその姿を発見する。

■変形アイテム／ホワイトスプラッシュユデイルド

対象の膛内にジャストフィットした形で凝固し、寄生主の感情に応じて同種の種を発射することが可能。

一日に射精できる上限回数は決まっており、10回まで。

日を置くか宿主を変える事で再度装填される。

射精の際に宿主の生命力も少し吸われる。

「アイテム作ったので全部っぼいです」

「アイテム? 何の話?」

「それがこの子、どうやら女同士とまぐわってその感情を成長促進剤に種と誘発させてアイテムを作り出す何ともおかしなスキルを持っています?」

「聞いた事ないものね。スキルのお名前だけでも聞かせてもらえるかしら」

「はい混種の抽選というスキルです」

「知ってるか?」

「待って頂戴。確か大昔に滅んだ国の古い文献で見たことあるわ」

シャリファさんはギルドの奥に引っ込むと、戸棚からいくつかの書類を引っ張り出してきた。その中の一冊を取り出し、

「あった。これだわ。人類から男子が消えて久しく、異形と寄り添う事を強いられた時に発芽した古代の錬金術。その中でもとりわけ特殊なスキルが……」

「エトに宿ったと?」

「わからないけど、それだけ特殊なスキルよ。大事になさい」

「はい」

「出所が判明して良かったじゃないか」

ミーアさんにワシワシと頭を撫でられる。

しかし失った種の損失を考えて何やらシャリファさんは考え込んでいた。

「あの、シャリファさん」

「なに？」

「もし良ければコレ、使ってみませんか？」

「え？」

私が両手から取り出したアイテムを見て困惑する彼女。

どう見ても真っ白なお団子状のそのスライムは、みるみる張り型へと変形していったからだ。

「多分ですけど、これはここにつけるんだと思います。あひゆ、んあ。何かチューチュー吸われています。ちよつと、気持ちよすぎてことばがだしえましえん」

クリトリスに根元の部分をくつつけると、シロの本能が働いて陰核を締め上げた。

みるみるうちに白い体表は肉肉しいそれに変わり、男を思わせる肉茎に変貌する。

脈打ち、反り上がるその姿は男のシンボルそのもので、しかも種まて出せるおまけ付きである。

だが今の私は男だった時の感覚は薄く、女の部分が優っているため、やはり興味を失ったかのようにぼとりと地面に落ちては他の宿主を探し求めた。

「落ちちゃったわね」

「使い手を選び好みするんです。誰でもいいみたいじゃないですね」

「作り手なの？」

「私がメスだからでしょう。なのでミーアさん、どうぞ」

「これがあればあたしはエトを孕ませられるのか？」

「多分ですけど。ただし上限は10発までで、それなりに体力を消耗

するようです」

「それは本当？ 異形に頼らなくても女同士で子を増やせると言うことよね？」

「ホワイトスプラッシュスライムに限定されちゃいますけど、それでも良ければですね」

シャリファさんはゴクリと喉を鳴らした。

希少種の種を宿することがまるで女のステータスであるかのように、ミーアさんの股間で脈打つそれに視線を促した。

「もし本当にそうだったらエトさんはウチの救世主になるわ」

「そんな、大袈裟ですよ。私はただ、貰ってばかりの現状だとダメだになって、ミーアさんとリヤナさんに何か恩返ししたいなと思っただけで……」

「その気持ちを持つてるだけでも素晴らしいわ。後であたしとも寝ましようよ。ミーアが夢中になるほどの何かがあるにはあるのでしよう？」

え、え？

何で急に私誘われてるの？

この人も急に豹変するし。私チョットわからないなー。

バカなふりすれば見逃してもらえない？

貰えなさそうだ。

ガシツと掴まれた肩が万力で締め上げられる程に強い力で固定される。

「あーあ、エト。やばい人に目をつけられちゃったな」

「シャリファはアタシの10倍くらい性癖が歪んでるから帰ってきた時にアタシのテクで満足させられるか不安だ」

「チョツ、何で置き去りにされること決定されてるんですか？ 嫌ですよー」

「このギルドのメンバーは全員シャリファと肉体関係だぞ？ つまりはそういう事だ」

「は、え？」

「もしも相手がご主人じゃなければ助けてやれるんだがなー、相手が

悪い。ここは一つ耐えてくれ。なーに、全員がシヤリファの棒姉妹のようなものだ。それによつてより強い絆が生まれてる」

「ふえええ!」

この人、生えてるの？

聞いてないよ!!

「大丈夫、痛くしないわ。それとリヤナは後で反省室に来なさい」

「えー」

「えーじゃありません。新人にデタラメを教えて怖がらせた罰よ。あたしはプラント種のドライアドだけどね、そんな変態じゃないもの」
「冗談」

ミーアさんが啖呵を切り、どこからか伸びてきた蔓で首を絞められた。

リヤナさんに至つては足を縛りつけられて逆さ吊りだ。

まるでそこに一つのオブジェが出来上がったように、見事にギルドにフィットしていた。

「本当にバカばかりで困るわ。そうよね、エトさん?」

「えーと、あはは……あれでもお二人は私の保護者なのでほどほどにしてあげてくださいいね?」

「エトさんの優しさに感謝することね! 後三時間、それに耐えたら許してあげるわ。エトさんに言われなきや三日は吊るすんだから感謝するのよ!」

なにそれ、怖い。

それこそプラント主にとってはそれくらい当たり前なのだろう。

ミーアさん達は慣れた様子でそれに耐えていたので多分大丈夫なんだろう。

それよりも自分の心配をしなれば。

ミーアさんが抱くより強い感情が肌にまとわりついてくるようだった。

案内されたマスタールームでは、すでに幾人かの女性が蔦に磔にされて壁と一体化している。そんなオブジェじみた室内で、私の体はベッドに押し倒されていて、

「そんなに怖がらなくても痛くしないから。さ、体を楽にして
今まさに食べられようとしていた。」